

山本教人先生を偲ぶ

熊本学園大学 橋本公雄

山本教人先生が突然病魔に侵されているのを知ったのは5年前の1月のことであった。鹿児島島の指宿で開催される「菜の花マラソン」に出場するために出発されるその朝、からだに異常があり、緊急入院、そして手術。それから闘病生活が始まった。とはいえ、その後は通常と変わらない生活をしておられたので、私が健康科学センターに在職中は特段心配することもなかった。今年の5月健セの駐車場で西村秀樹先生と話していたとき、たまたま山本さんが通りかかったので、「やあ、元気にしているね」と声を掛けた。しばし談笑している中で、今年の1月に再度異常が見つかったと話された。「えっ、定期的に検査を受け、健康管理にも十分注意していたのに、なぜ」。そのまま完治するのではないかと思っていたし、そうあってもらいたいと日々祈っていたので、一抹の懸念を抱いた。しかし、当の本人は「もうだめばい」と言いながらも、明るく笑い飛ばしていたし、病魔と対峙する片鱗もみせておられたので、そのときはこれほど重大なことになるとは思ってもいなかった。

山本さんは朝型の生活リズムで、朝早く起きて仕事をし、それから大学へ出勤。それもときには自転車での通勤もあった。本格的なサイクリング自転車を持っておられ、休暇中には九州1周をしたり、海外にも出かけて自転車で旅をされていた。自転車には相当に詳しく、マニアックであった。また、学生時代から陸上部で鍛えた体がうずくのか、夕方5時になると仕事を切り上げ、ランニング姿で健セを飛び出して行かれる。健セの中では誰よりも良く運動し、規則正しい生活をされていた。生活習慣病の予防、健康の維持増進からいえば模範的な生活をされていた。そのような先生が突然病に倒れ、若干52歳の若さで逝かれるとは何とも言いようのないやせなさを感じる。「死は一定である」と言えどもあまりにも早すぎる。

彼は宮崎県日向出身で、健セには事務の女性の方と私も延岡出身だったので、どことなく宮崎県人会じみたところもあり、親しみを感じていた。よく子どものころの野山での悪遊び（蛙に爆竹をくわえさせて破裂させたことやアケビ取りに明け暮れていたこと）をしていたことを自慢げに話されていた。結構腕白な少年時代を送っておられたのではないかと思われる。鹿児島大学に進学され、岡田猛先生に師事を仰ぎ、スポーツ社会学を学ばれている。卒業後は筑波大学大学院修士課程進学、1990年筑波大学大学院博士後期課程体育科学研究科を終え、その年の4月に菊幸一先生（現筑波大学大学院、スポーツ社会学）の後任として健セに赴任してこられた。スポーツ社会学系は多々納秀雄先生、金崎良三先生、山本教人先生の錚々たるメンバーとなり、学会の事務局を引き受けるなど精力的に学会の草創期の礎を築くのに貢献されていた。健セのスポーツ社会学系の黄金時代の一人であった。

赴任されてこられた頃はG. H. Meadの自我論の研究をされており、よく“I”とか“Me”とか、何か小難しいことを研究発表されていたことを思い出す。スポーツ社会学の中でも理論派であった。今は亡き多々納先生たちと相当議論もされていたようである。その一方で、健セのプロジェクト研究（血圧の研究、健康外来の構築に関する研究など）や上海体育学院大学との共同研究など専門領域以外での研究にも積極的に参加されていた。中国の先生方を日本に招聘したり、私たちも上海に行ったりと共に行動することも多かった。近年に至ってはメディア・スポーツに関する研究がメインテーマであり、持久走のジョギング（健康走）化に及ぼしたメディア言説の影響に関する研究、メディアとしてのスポーツの機能に関する社会学的研究、「九州一周駅伝」報道の社会学的研究などを手掛けられ、マスコミに取り上げられることもたびたびあった。

1997年に私がアリゾナ州立大学へ、そして山本さんがノースキャロライナ州立大学に同時期に留学

していたとき、アリゾナ・フェニックスに短パンとサンダル姿で遊びに来られた。グランドキャニオンやさまざまなルーインを二人で観光したことが走馬灯のように思い出される。アリゾナは暑く、日焼けし、サンダルの帯の跡がくっきり足の甲について、「ひゃー、こんなに日焼けした」とはしゃいでおられたことが懐かしい。

山本さんは本九州地区大学体育連合には九大に着任してからすぐに参画され、大学体育授業のあり方の議論にも積極的に関わっておられた。大学体育の教育にも熱心であった。九州体育・スポーツ学会にも毎回参加・発表もされ、理事としても何度も選出されており、学会の発展に多大な貢献をされた。学会のあり方を検討していたとき、シンポジウムで九州体育・スポーツ学会は「発展や拡大を目指すのではなく、小さな学会を目指し、とことん議論をするべきである」との持論を展開されていたのが、非常に印象に残っている。ここは私と少し意見が異なっていたので、よく記憶している。温厚でありながらも歯に衣着せぬところもあった。いずれにしても本体育連合や九州体育・スポーツ学会で中心的な役割を果たしておられたことは間違いない。将来は両組織の中心となって活躍されていかれる方と信じ、期待していただけに、あまりにも早すぎる逝去は残念でならない。

最後の1ヶ月間は週末、毎週西村秀樹先生とお見舞いに行っていたが、会うたびにからだの状態や置かれている状況が悪くなっているようで心配をしていた。最後まで前向きで気丈に振舞われていた

が、亡くなられる10日前に「相手が強すぎた」「何か悪いことをしたのかな」とぼつりと言われたのが、最後の言葉。「何を言いよつとね。頑張らんと」と励ましたのだが。まだまだやりたいことが沢山あったであろうに残念至極である。

山本教人先生、これまでの九州地区大学体育連合や九州体育・スポーツ学会の発展へのご尽力、大変にありがとうございました。先生の意思と努力を無にすることなく、継承し、残された者で両組織の発展に寄与してまいります。どうか安らかにお休みください。



アリゾナの鉄板焼きレストランにて